469 乳切後 5年以上の経過にて発症した骨転移

小野慧，猪狩秀則，伊勢俊秀，中村豊，柚田勝輝，田中利彦
（神奈川がんセ 核） 松井謙吾（横浜市大 放）

乳癌骨転移の晩期再発例の臨床像を調べた。昭和57年 1月から61年 6月までに施行された4400回の骨シンチのうち乳癌症例 800例の骨転移率は約14% であった。このうち手術後 5年以上の間をおいて骨転移の発見された晩期再発例は23例であった。骨シンチはTc-99m-MDPを用い、全身前後面像と局所像を撮像した。骨転移の診断は理学所見、X線所見、経過観察等を総合して行った。

晩期再発骨転移の好発部位はとくになく、骨転移様式（単発、多発、系統的）にも特徴はみられなかった。手術年令は36～48才の間に75% が集中し、乳癌全体の手術時年令分布と比較し、差をみとめた。晩期再発年令時も42～54才の間に65% と多く、乳癌全体の骨転移発症年令と差異を生じた。TNM 、病理所見との関係にも検討を加える。

470 乳癌における骨転移検出時期についての検討

戸川貴史，油井信春，木下富士美，小圷正木，
（千葉がん 核医） 秋山芳久（同 物理）

乳癌における骨転移が術後どのぐらいの期間に亘って検出されるか retrospective に検討した。対象は術前および術後定期的に行われた骨シンチグラフィ，又は骨単純X線写真上の所見から骨転移と確診された術後乳癌４９例である。手術時の年令分布は２５～７５才（平均４６才）で，臨床病期は stage Ⅰ ４例，stage Ⅱ １３例，stage Ⅲ １３例，stage Ⅳ ７例，不明例１２例であった。stage Ⅳ ７例を除外した４２例を，骨転移検出時期に基づいて累積すると１９例（45.2％）は術後２年以内に，又，３３例（78.6％）は術後５年以内に骨転移が検出されており，術後５年以降の骨転移検出例は９例（21.4％）のみであった。又，stage，組織型，n因子およびf因子の明らかな２２例において，stage以外の病理組織学的因子から Prognostic Score を算出した。stage Ⅰ・Ⅱ対Ⅲの骨転移症例の比は１３：９であったが，Score ５・６群対７・８群の比は６：１６であり，今回の骨転移症例の約７０％はScore 7.8群に分類された。又，Score 7.8群の１６例中１２例（75.0％）では，各症例の骨転移が骨転移出現推定期間内に検出された。

471 肺癌骨転移巣の骨ｼﾝﾁｸﾞﾗﾑによる検討 －組織型による相違－

吉岡清郎、松沢大樹、佐藤多智雄、山田健嗣（東北大抗研放）瀬尾信也（南町ｸﾘﾆｯｸ）尾形優子（仙台厚生病院）

肺癌は悪性腫瘍の中でも比較的高頻度に骨転移をみる疾患である。われわれは、昨年３月末より本年６月までに、原発性肺癌234例268回の骨ｼﾝﾁｸﾞﾗﾌｨｰを経験した。検査肺癌症例の組織型の内訳は、扁平上皮癌68例、腺癌52例、小細胞癌36例、大細胞癌28例、その他10例及び検査時細胞診未確定40例と約85%の症例で組織診がついた症例であった。これら組織診と骨転移の出現頻度、骨転移巣の分布、また腫瘍部へのＲＩ集積の有無等について検討を行ってきた。

これまでの検討で、上記４種の組織型の中では腺癌に骨転移出現頻度が最も多く、扁平上皮癌の頻度が最少であった。また骨転移の機序では血行転移を考えさせる全身散在性の分布が腺癌で高率に、扁平上皮癌では直接浸潤を思わせる限局性の異常集積が比較的高頻度に出現する印象があった。

さらに解剖学的区分による骨転移巣分布の組織診による相違の有無、時に認められる腫瘍部ＲＩ集積と組織診との関係、肺癌と他の悪性腫瘍の骨転移巣分布の相違の有無等を検討し報告する。

472 肺癌症例の骨シンチグラフィーの検討

北野 保，福永義純，高田 実*，中筋孝史，
田名原マサ子，豊田敬子，宮川トシ
（大阪府立羽曳野病院 RI科，内科*）

肺癌症例の骨シンチグラムについて検討した。対象は肺癌患者 239 例（男183，女 56）で組織型は腺癌69 例，扁平上皮癌74 例，小細胞癌83例，大細胞癌13例であった。機種は，シーメンス社製LFOV型シンチカメラを用いた。

肺癌患者全例 239 例中^{99m}Tc－HMDPの異常集積を認めた陽性者は 78例（32.6%）で，各組織型の陽性率は，腺癌43.5%（30／69），扁平上皮癌29.7%（22／74），小細胞癌22.7%（23／83），大細胞癌23.1%（3／13）であった。関節炎，圧迫骨折等の凝陽性者は7.5%（18／239）であった。各組織型別平均陽性個数は，腺癌 1.65，扁平上皮癌0.68，小細胞癌0.72，大細胞癌0.31 と腺癌例で多い傾向であった。更に2個以上の多発性陽性率は，各組織型別にみると腺癌 40%（12／30），扁平上皮癌 22.7%（5／22），小細胞癌 47.8%（11／23），大細胞癌 0%（0／73）で腺癌，小細胞癌症例で 2 個以上の多発陽性が多いことが示された。血清CEA値，ALP，Ca，Pと骨シンチグラム陽性との関係，化学療法前後の骨シンチグラムの変化等につい

Presented by Medical*Online